



TITLE:

バプテスト宣教の文脈からみる
19世紀中葉ビルマのカレン像形成:
宣教師メイソンによる『カレンの
使徒』(1843)を題材に

AUTHOR(S):

藤村, 瞳

CITATION:

藤村, 瞳. バプテスト宣教の文脈からみる19世紀中葉ビルマのカレン像
形成: 宣教師メイソンによる『カレンの使徒』(1843)を題材に. 東南ア
ジア研究 2015, 52(2): 295-322

ISSUE DATE:

2015-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197822>

RIGHT:

©京都大学東南アジア研究所 2015

バプテスト宣教の文脈からみる 19 世紀中葉ビルマのカレン像形成
—— 宣教師メイソンによる『カレンの使徒』(1843) を題材に ——

藤 村 瞳 *

**Reconsideration of the Karen Image in Mid-Nineteenth Century
Burma within the Context of the American Baptist Mission**

FUJIMURA Hitomi*

Abstract

This paper aims to argue for a reconsideration of the historical interpretation of the Karen image in Burma through a contextual analysis of descriptions of Karen Baptists in the mid-nineteenth century.

Karen history has been written with a heavy focus on Karen Baptists, who account for only a minority of the Karen population, and has relied on missionary documents accumulated in the nineteenth century. This Baptist-centered viewpoint is under criticism since it overlooks the existence of the remaining majority, Buddhist Karens. In addition, it has been pointed out that the image of the Karens is biased since it is based on foreigners' views: missionaries' writings on the Karens were highly vulnerable to the missionaries' own motives to depict the Karens the way they wanted them to be. This paper sets its focus on the latter argument, since there has not been enough analysis on it; if the writings on the Karens are biased due to missionaries' views, those descriptions and background factors need to be understood within the context of the Baptist mission.

Examining a missionary writing, *The Karen Apostle*, as an example in the formation of the Karen image, this paper clarifies that Baptist doctrines and mission policies had an important influence on the depiction of Karen Baptists. The author Francis Mason described the first Karen convert, Ko Thah Byu, as an example of "ideally hardworking, pious Baptists" to emphasize the success of the Karen mission and obtain financial support for future development. This finding implies that the depiction of Karen Baptists in the mid-nineteenth century should be interpreted not only in terms of ethnicity or nation but also with reference to American Baptist history. This viewpoint calls for a need to reconsider the historical understanding of Karens from a different perspective, such as from within the context of the American Baptist mission.

Keywords: Karen image, American Baptist missionary, Burma of the nineteenth century, Karen history

キーワード：カレン像, バプテスト宣教, 19 世紀ビルマ, カレン史

* 上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科：Graduate School of Global Studies,
Sophia University, 7-1 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0094, Japan
e-mail: hitomifujimura@gmail.com

は じ め に

本稿は、米国バプテスト派宣教史料の分析を通じて、19 世紀中葉のビルマにおけるカレン¹⁾の描写の在り方について検討するものである。特に、アメリカの伝道機関と現地宣教との関係に着目することで、当時のカレン描写が宣教方針や伝道機関側の状況によって規定される側面があったと論証することを目指す。以下ではまず、カレン研究における米国バプテスト派宣教史料の位置づけを確認し、本稿での分析視角を明らかにしておきたい。

米国バプテスト派宣教史料を含む欧文史料は、これまで多くの先行研究においてカレン民族の歴史的背景を叙述するために用いられてきた〔飯島 1974; Harriden 2002; Rajah 2002; Gravers 2007; Kuroiwa and Verkuyten 2008〕。そこでのカレン史理解は、概ね次のような内容である。それは、19 世紀前半に米国バプテスト派がカレン宣教に積極的に取り組み始めたなかで、「キリスト教徒であるカレン民族」というイメージが形成された。これを引き継いだイギリス植民地行政は民族区分に基づいた分割統治を行ない、キリスト教徒であるカレン対仏教徒であるバマー²⁾という対立構造を確立していった。そのなかで次第にカレンの民族意識は先鋭化し、20 世紀に入るといわゆるカレンナショナリズムが興隆した、というものである。

上記のような通説的なカレン史理解について、カレンに関する知識の蓄積過程を丁寧な史料批判に基づいて跡付けた池田〔2012〕は、その限界を指摘する。池田は、まず 19 世紀のバプテスト宣教師による聖書翻訳や辞典類、宣教記録も含めた著作、出版活動がカレン知識の基盤を形成するうえで重要な役割を担ってきた点を体系的に論じる〔同上書: 223-238〕。³⁾ これら

- 1) ビルマにおいてカレンと呼ばれる人々は、1983 年の人口統計の時点で約 219 万人を擁する同国第 3 の人口規模を持つ人々である。一つの民族といっても彼らの実態は多様で、カレン系諸語といっても主要なものとしてはスゴー、ポー、ブゲエーとあり、さらに言語的下位グループは約数十種類におよぶ〔加藤 2011: 272-275〕。キリスト教スゴー・カレン、キリスト教ポー・カレン、仏教ポー・カレン（西ポー・カレン）など各言語に対応する異なる文字が使用される。居住域もデルタ地域やエーヤーワディー流域などから、タウングーやカレン州の山あいの地域までと広範囲にわたり、さらには国境を越えてタイ側にも居住している。信仰する宗教も多様でカレンの 7-8 割は仏教徒であるが、1 割強を占める少数派のキリスト教徒に加え、精霊信仰やイスラム教を信仰する人々もいる。
- 2) 本稿では「ビルマ語を母語として使用する人々」の総称として「バマー」を用いる。「ビルマ族」「ビルマ人」等の表現がより一般的であるが、本稿が扱う時代のビルマにおいて、近代的な意味での民族的な枠組みは人々のあいだでさして優勢ではなかった。しかしカレンの場合と同様に「ビルマ」と表現すると、地域としての「ビルマ」と人々を指す「ビルマ」が混在してしまう。混乱を避けるため、上記の表現にて統一する。
- 3) 池田は、最初期の宣教師のなかでもメイソンとウェイドによる著作活動が特に重要であったと述べる。両名の活動については本論のなかで詳述するが、詳細は池田〔2012〕を参照のこと。また、カレンという民族形成について、速水〔2002〕は宣教師の果たした役割が一方的に強調され、キリスト教を受容したカレン自身の主体性が看過されていると主張する。その主体性を担ったカレン伝道師の一例として、本稿が扱うタービュの積極的な活動を取り上げている〔同上書: 264〕。カレン信

の記録に基づいたカレン民族観は、1939 年に発表されたスゴー・カレン語によるカレン民族史にも引き継がれ、カレン自身の側にも影響を与えた。さらに、20 世紀以降におけるカレンに関する知識の大部分もキリスト教徒カレンを中心に記録した宣教史料に依拠してきたという池田の指摘は、上述のカレン理解の限界を示す重要なものである。その理由は、この指摘がカレン人口の約 7 割以上を占める仏教徒の存在が歴史的に看過されてきたことを同時に示しているためである [同上書: 177-183]。バプテスト・カレンを中心としたカレン民族史が構成されてきた理由の一端は、カレンに関する知識の蓄積過程にあるといえるだろう。

加えて、伊東の一連の論考 [2006a; 2006b; 2011; 2012; Ito 2007] は、「カレン民族」という枠組みそのものの歴史的有用性を問う。伊東によれば、バプテスト宣教師に限らず、18 世紀後半からビルマを訪れた使節団などの欧米人はそれぞれの政治的意図や必要に応じて「カレン民族」を描出してきた。⁴⁾ 近代西洋的な民族観によって土着の人々が一面的に捉えられた一方、当時のビルマ社会では人々を「バマー」や「カレン」という括りで規定する捉え方はさほど重要ではなく、このような民族分類に基づいた意識は希薄であった [伊東 2011: 65-71]。両者の議論は、従来のカレン史を批判的に検証し、「カレン民族」が如何なる社会政治的文脈のなかで何のために記録されたのかという点に留意する必要性を示唆している。この視点は、バプテスト・カレン中心の歴史観や民族観からの脱却を目指す研究潮流とも重なり、近年の重要な研究視角の一つであるといえる。⁵⁾

上記のような研究潮流に対し、書き手側の置かれた文脈がカレン描写に影響してきたという点に注目すれば、米国バプテスト派宣教史料の記述が再検討されてきたか問うことも可能である。宣教史料の大半は、宣教地での活動をアメリカの伝道機関に報告するために作成された。そのため、土着の「民族集団の特徴を、それを知らない人にむけて表現しようという機制」が働きやすい性格をもつ [池田 2012: 218]。つまり、これらの史料は伝道機関が置かれたアメリカ側の事情を踏まえて分析されるべきである。大江 [2003] によれば、近代キリスト教海外伝道研究において「宣教サイド」に関する蓄積は少なく、海外宣教師と母教会伝道機関の関係性がとりわけ重要である。その理由は、海外宣教の主導権の所在の問題や、現地で活動する宣教

4) 徒の主体性や宣教団との関係については十分に明らかにされておらず、カレン研究における研究課題である。

4) 具体的には、「重税を課し圧政を敷く」ビルマ王朝の姿を際立たせるために、王朝の支配下で抑圧されてきた、素朴な民族としてカレンが描写された。このような記述における関心は、イギリスの敵である王朝をいかに描き自己の政策を正当化するかという点にあり、カレン自体を描きだそうとする意図は希薄であった [伊東 2006a: 32-34; 2006b: 35-40]。

5) 例えば、通説的なカレン理解を問題視し批判的な議論を試みた Thawngmung [2011] が挙げられる。Thawngmung は、武装闘争を展開するカレン民族同盟やカレン民族主義に象徴される「反ビルマ」的なカレン・イメージがあまりに一面的であるとして、「もう一方のカレン (The Other Karen)」の生き方や語りを描き出している。

師が経済的、教義的、制度的に伝道機関の方針に拘束されるという限界が常に存在するためである〔同上書: 113-114〕。この視座から宣教史料を再検討する姿勢は、従来のカレン研究においてほとんど見られない。⁶⁾ 本稿ではこの点に注目し、19 世紀中葉のカレン像形成を米国バプテスト派宣教の文脈から捉え直してみたい。

米国バプテスト派の膨大な史料のなかでも、本稿では宣教師フランシス・メイソン (Francis Mason: 1799-1874) によって 1843 年に発表された『カレンの使徒 —— カレン初の改宗者コー・タービュの伝記、彼の民族に関する覚書と共に (The Karen Apostle: Or, Memoir of Ko Thah-Byu, the First Karen Convert, with Notices concerning His Nation)』(以下、『カレンの使徒』)を取り上げる。同著はカレンのなかで初めて受浸⁷⁾したコー・タービュ (Ko Thah Byu: 以下、タービュ)⁸⁾の伝記であり、初期のカレン宣教に関する文献としてビルマ国内外で知られ、学術分野においても頻繁に参照される。タービュはバセイン地方出身のスゴー・カレンで、気性が激しく殺人なども犯す罪人であった。しかし、受浸後はカレンの伝道活動に専念し、信仰深いキリスト教徒の代表格として知られており、最も有名な歴史上のカレン・バプテストである。⁹⁾

『カレンの使徒』の初版はアメリカのボストンで出版され、ビルマのモールメイン印刷局においても 100 部刊行された [Board of Managers of Baptist General Convention (以下 BMBGC) 1844: 200; Mason 1843: iii]。¹⁰⁾ 同著は 7 章構成であり、巻末には 7 編の付録が付され

6) 伊東は、「無辜の民」というカレン像の創出に関する議論のなかで、初期のカレン宣教師の記述とその関心の所在についても論じている。伊東によれば、宣教師ボードマンは宣教対象である未開の民として、「素朴であるが、怠惰で無気力な」カレンの姿を描くことに関心があったという〔伊東 2006b: 40-42〕。そしてこの視点が 1830 年代になっても概ね引き継がれていたと論じるが〔伊東 2011: 57-60〕、これはキリスト教を受容していない(或いは受容する以前の)カレンに関する記述であろう。ボードマンの死後、カレン宣教の急速な拡大に伴い、バプテスト信徒となったカレンの「勤勉で敬虔な」様子に関する記述も増大した。カレン＝キリスト教徒というイメージが後に主流となった経緯からも、本稿ではバプテスト・カレンに関する記述に焦点を絞る。

7) 本稿では「baptism」「baptized」などの訳語として、「浸礼」「浸礼式」「受浸」を用いる。より一般的な用語としては「洗礼」があるが、バプテスト派では身体の上部まで水につかる浸礼が唯一正しい洗礼作法とみなされるため、本稿での表現もこれに倣う。

8) 人物名の表記については、代表的なビルマ語名、カレン語名の冠称として Ko, Maung, U, Saw などがあるが、個人名ではないため省略する。ただ、タービュについては依拠史料の表題に「Ko」が付されているため、初出のみ冠称を付した。なお、引用文中に冠称がつけられている場合には原文の表記を採用した。

9) 2013 年に開催されたカレン・バプテスト連盟 100 周年記念式典では、タービュを主題にした劇が上演され、カレン宣教史における重要人物としてカレンのなかではただ一人タービュの名前が挙げられていた。現代においても、タービュがカレン・バプテストの歴史を語るうえで欠かせない人物であることが窺える。

10) 『カレンの使徒』の著作権は後にロンドン文書協会 (London Tract Society) に買収され、同協会のシリーズ本の一部として出版された [Mason 1870: 278]。初版はすぐに在庫がなくなったようで、同年の 5 月には第 2 版が重版されたほどの人気であった [BMBGC 1843: 231; 1844: 19]。

ている。内容の大半は、タービュの生涯にわたる熱心な活動の記録と神の恩恵に対する賛美に関するものである。後半部分では、本論にて詳述するように、敬虔な信徒としてのタービュの存在を何よりの証拠として、カレン宣教の成功と財政面での利点が強調され、同著の主題として提示される。ここで奇妙なのは、後の時代においては『カレンの使徒』は単にタービュの伝記として扱われるばかりで、上記で示したようなカレン宣教の成功と財政面での優位性を訴える主張はほとんど見過されてきたという点である。なぜ、『カレンの使徒』で上述のようなタービュの姿が描かれ、肝心の主題は後に強調されなくなったのか。伝道機関と現地宣教の關係に注目することで、同著の記述の特徴と歴史的な文脈を明らかにしたい。

本稿では 1843 年に出版された『カレンの使徒』初版を使用した。この他に宣教方針や当時の状況を明らかにするために、バプテスト海外伝道連盟の機関紙¹¹⁾も用いた。同誌は各宣教地からの報告を掲載した月刊紙で、バプテスト伝道局年次総会の議事録や会計報告をまとめた年次報告書¹²⁾も含む史料である。著者であるメイソンの生い立ちや『カレンの使徒』執筆の意図については、自伝『ある労働者の生涯の記録 (Story of a Working Man's Life)』(1870) を参照した。

本稿の構成は以下のとおりである。第 I 章において、アメリカの伝道機関であるバプテスト伝道局の設立経緯から 1840 年までの宣教史を概観し、カレン宣教の位置づけを確認する。続く第 II 章では、『カレンの使徒』の内容とその主題を明らかにする。第 III 章では、『カレンの使徒』における主題およびタービュの描写について、バプテスト派の教義や伝道局の財政悪化による宣教運営方針の変化との関連から分析を行ない、考察を加える。

I 1810 年代-1840 年までの米国バプテスト派宣教史とカレン宣教

まず、米国バプテスト派伝道機関の設立から 1840 年までの宣教活動史を概観する。¹³⁾ ここではビルマでの活動のみを中心とした従来のカレン宣教史とは異なり、伝道機関による宣教活

11) 1820 年の創刊当時の同雑誌の誌名は『米国バプテスト雑誌 (American Baptist Magazine)』であった。1836 年に『バプテスト宣教雑誌 (Baptist Missionary Magazine)』と改称されたが、バプテスト伝道局の定期刊行物であることに変わりはなく、掲載内容にも変更はないので一連のものとして扱う。

12) 年次報告書は、各宣教地の年間活動の報告と前年度の会計報告から成る。会計報告には、前年度からの繰越金、各宣教地域、支部ごとの支出と収入、寄付者、寄付団体の名簿と寄付金額のリストなどが記載された。

13) ビルマ宣教の試みは、ポルトガルやフランスのカトリック宣教師によって 19 世紀以前から既になされていた。古くは 1550-60 年のあいだにポルトガルからドミニコ会士のガスパール・デ・クルス (Gasper de Cruz) とボンフェルス (Bomferrus) が訪れたという [Go Lām Pau 2012: 7-8]。カトリック宣教師らが相次いでビルマから撤退したのに対し、米国バプテスト派は初めて本格的にビルマに拠点を構え、継続的に現地において活動した点で歴史的重要性が高い。

動全体の歴史のなかにカレン宣教を位置づけてみたい。そのうえで、当時のカレン宣教が米国バプテスト派の他の宣教地を凌駕し、海外宣教全体を牽引するほどの著しい発展を遂げていたことを示す。

I-1 米国バプテスト派による海外伝道機関の創設 —— 1810 年代前半

米国バプテスト派の伝道機関創設は、会衆派の海外宣教師アドニラム・ジャドソン (Adoniram Judson: 1788-1850) とルーサー・ライス (Luther Rice: 1783-1836) がバプテスト派に転向したことをきっかけに構想された。ジャドソンとライスは、1810 年に有志数名と共に会衆派の年次総会において海外伝道開始の許可を請願した。この請願はただちに承認され、支援団体として超教派のアメリカ海外伝道局 (American Board of Commissioners for Foreign Missions (ABCFM): 以下、アメリカン・ボード) が設立された。しかし、設立当初のアメリカン・ボードは宣教師派遣の経験もなく資金も乏しかったため、英国バプテスト派の支援を受ける形で、ジャドソン他数名をインドへ派遣した。しかし、ジャドソンは、この航海の途中でバプテスト派の教義理解こそが聖書に最も忠実であると考えを改めた。1812 年 9 月にインドのセラムプール¹⁴⁾に到着すると、英国バプテスト宣教協会 (English Baptist Missionary Society)¹⁵⁾のワード牧師による浸礼を受けバプテストへと転向した [Grammell 1854: 7]。

ジャドソンにつづきライスもバプテスト派へと転向し、二人はバプテスト派による伝道活動を開始すべきという考えに至った [*ibid.*]。しかし、支援団体であるアメリカン・ボードは、バプテスト派以外にも会衆派や長老派などを擁する超教派の協力団体として、プロテスタント諸派による協働を目指していた [溝口 1964: 10]。ジャドソンとライスによるバプテスト派海外伝道機関創設の構想は、上記の目的を掲げていたアメリカン・ボードに対する一種の分離運動として捉えられ、支援は打ち切られることになった。

アメリカン・ボードからの支援打ち切りに加え、同じバプテストである英国バプテスト派からの支援も望めないことがわかったと、ジャドソンとライスは独自に資金調達を行なうことを決めた。ジャドソンが現地に残り宣教を継続する一方、ライスはバプテスト派による支援体制を整えるため、1812 年 3 月にアメリカへ向けて出航した [Peck 1840: 359]。

アメリカ帰国後、ライスはバプテスト派諸教会に協力を呼びかけた。そして 1814 年 5 月にフィラデルフィアにて集会が開催され、アメリカ全バプテスト海外伝道連盟 (The General

14) インドのカルカッタ (現コルカタ) から北に約 15 キロの地域にある町。18 世紀から 19 世紀中ごろまでデンマーク領であり東インド会社の福音宣教敵視政策の影響が及ばない地域であったため、英国バプテスト宣教協会はこの地に拠点を置いた。

15) 英国バプテスト派は 1799 年頃に 1 度ビルマにおける宣教を試みているが、活動が軌道に乗らなかったため数年後に撤退した。

Missionary Convention of the Baptist Denomination in the United States of America, for Foreign Missions: 以下、伝道連盟)¹⁶⁾ という伝道機関と、実質的な運営を担うバプテスト海外伝道局 (Baptist Board of Foreign Missions: 以下、バプテスト伝道局) が設立された [*ibid.*: 362]。それまで独立していた各地の地方連合をとりまとめ海外宣教の基盤を構築した点で、伝道連盟およびバプテスト伝道局の設立は米国バプテスト史における一つの画期といえるものであった。伝道連盟は 3 年ごとに総会を開催したが、宣教師の任命から会計管理に至るまで運営業務全般を担ったのはバプテスト伝道局である。よって、以下では本国側の組織としてバプテスト伝道局を取り上げる。

伝道機関設立に際し、基本的な宣教方針も確認された。上述のフィラデルフィアでの会合においてライスが提出した意見書には、宣教方針に関する基本的な考え方がよく示されており、以下はその抜粋である。

宣教支部の最も重要な目的は、これまでもそして現在も聖書の翻訳である。……今新たに設立される宣教支部は重要な地に拠点を置き、在地の人々の言語と文字に精通し、その言語への聖書翻訳をきわめて高い精度にまで引き上げ、その言語が話される地域において、有用な福音の知識を広めるべきである。[BMBGC 1814: 13]

上記からは、聖書の現地語翻訳、現地語の習得、そして福音伝道が活動の基本とされていたことがわかる。伝道連盟設立の提唱者として影響力を持ったライスが示したこの考えは、米国バプテスト派の活動方針の土台となった。この方針はバプテスト派が特に重視する宣教理念であると同時に、英国バプテスト宣教協会との協力関係を反映したものでもあった。バプテスト伝道局は設立当初より英国バプテスト派から宣教活動に関する助言を受けていた。1814 年の伝道局創設時には、アメリカ国内のプロテスタント諸派ではなく、同じバプテスト派として英国バプテスト宣教協会の活動方針に従うことが明言されている [*ibid.*: 13-14; Peck 1840: 360]。同協会は、初のバプテスト派海外宣教師ケアリ (William Carey: 1761-1834) の宣教論を核として、現地語主義、現地の習慣への理解、自給の原則、そして聖書翻訳を活動の柱としていた [伊藤 1990: 25-28]。バプテスト伝道局もこの方針に倣い海外宣教の運営方法や方針を決定し、これ以降宣教活動を展開していった。

16) 1846 年には、奴隷制に対する見解の相違を理由に南部の諸教会が伝道連盟から分離した。同団体はこれをきっかけに、北部の諸教会を中心とした「米国バプテスト伝道連盟 (American Baptist Missionary Union)」と改組した。バプテスト伝道局も「米国バプテスト伝道執行委員会 (Executive Committee of American Baptist Mission: 以下 ECABM)」と改称したが、本稿が依拠史料とした『バプテスト宣教雑誌』の内容は変更されず、発行は継続した。

I-2 初期の宣教活動の拡がり ― 1813-20 年代

アメリカ国内において海外宣教の支援体制が整いつつある一方、アジア宣教の基盤構築を目指したジャドソンのインドでの活動は難航していた。当時、イギリス東インド会社が宣教師のインドへの出入りを制限する「福音宣教敵視政策」[村椿 2011: 97]を敷いていたことに加え、米英戦争（1812-13 年）の勃発による両国の関係悪化が影響したためである。インド滞在が許可されず帰国命令が発せられていたなか、ジャドソン夫妻は乗船が許可されたラングーン行きのジョージアナ号で、ビルマへ向かうこととなった [Shwe Wa *et al.* 1963: 1-3; Peck 1840: 358-359]。¹⁷⁾ 1813 年 7 月にラングーンに到着すると、ジャドソン夫妻は最初の数年間をビルマ語の習得に費やした。実質的な活動はビルマ語の「マタイ福音書」を配布した 1817 年ごろに開始され、1819 年には初の受浸者を得た。この頃の活動はより多くの人々への福音伝道を目的としたため、多数派であるバマーの人々を主な対象としていた。一方で、言語的制約もありバマー以外の人々への宣教は重視されていなかった。1823 年には、後にカレン宣教に深く従事することになるウェイド (Jonathan Wade: 1798-1872) 夫妻がラングーンに到着し、宣教団側の態勢は徐々に整いつつあった。しかし、第 1 次英緬戦争（1824-26 年）が勃発したため、宣教活動は約 2 年間中断した。

バプテスト伝道局は海外宣教支援を目的に設立されたが、国内における未開の「異教徒」とみなされていたアメリカ先住民への伝道にも着手した。1817 年の第 1 回連盟総会において、アメリカ先住民への宣教活動の開始が議決されている [Peck 1840: 377]。当初の宣教対象は、チェロキーや五大湖周辺に居住していたオタワ、マイアミ、シャワノオなどであり、後に他の部族へと拡大した [ibid.: 377, 384]。アメリカ先住民への宣教は「インディアン宣教」「国内宣教」と呼ばれ、ビルマ宣教とともにバプテスト伝道局の中心的な活動の一つと目された。この他にもアフリカ宣教が同時期に開始されている。アフリカ系アメリカ人の宣教師らが中心となって、1819 年にアメリカ植民地協会 (American Colonization Society) を設立し、1821 年にシエラ・レオネに最初の宣教師が到着した。翌年にはリベリアのモンロヴィアに宣教拠点を置いた [ibid.: 439]。1823 年には現地人初の受浸者を獲得し、その後も定期的に宣教師が任命、派遣されていた [ibid.: 439-445]。

バプテスト伝道局創設から 1820 年代前半までの約 10 年間は、ビルマ宣教と国内宣教という二大宣教地を含む宣教拠点が各地に開設された、米国バプテスト派宣教の萌芽期であった。な

17) ジャドソン夫妻のビルマ行きまでの実際の経緯は、より複雑である。帰国命令の期限が迫るなか、インド洋の南方のフランス領フランス島（現在のモーリシャス）行きをひとまず許可された。数カ月後には再びマドラスを目指して出航したが、米英戦争の影響により上陸許可は下りなかった。それでもマドラスに密かに上陸を果たすが定住は不可能であったので、ジャドソン夫妻はちょうど停泊していたジョージアナ号に乗り込みラングーンを目指すこととなった [Peck 1840: 358-359]。

かでも、バプテスト伝道局の活動全体に先鞭をつけたビルマでの宣教は重要であり、宣教活動全体の将来を占う意味でもその発展と成功が強く望まれていた。

I-3 カレン宣教の開始と発展 —— 1820 年代後半-1840 年

第 1 次英緬戦争後、ヤングボー条約によるテナセリム地方とアラカン地方のイギリスへの割譲は、ビルマにおけるバプテスト派宣教の活動を大きく変化させた。宣教に対する制約や反発が英領地ではより少ないだろうという判断から、テナセリム地方へと活動拠点が移転されたのである。ボードマン (George D. Boardman: 1801-31) が妻のサラと共に 1827 年 4 月にビルマに到着すると、ジャドソン、ウェイド、ボードマンの 3 名を中心として活動が再開された。宣教団はテナセリム地方の町アマースト¹⁸⁾とモールメインに拠点を構え、ウェイドがアマースト支部の責任者となり、モールメイン支部をボードマンが担当した。¹⁹⁾ 後に、モールメインの南部の町タヴォイに新たな支部を開設することとなり、ボードマンはタヴォイへと赴任した。この時、本稿が扱うタービュも現地人信徒の一人としてボードマンに同行している。

タヴォイ到着後まもない 1828 年 5 月 16 日に、ボードマンはタービュの浸礼式を執り行なった。その後も周辺のカレン居住地域を中心に、ボードマンはカレンの助手とともに積極的に説教を行ない、信徒を獲得していった [BMBGC 1829: 193-195]。1831 年の 9 月にはジャドソンがモールメイン周辺の山間部にあるカレンの村々を訪問し、カレン宣教に本格的に取り組み始めた様子が窺える [Shwe Wa *et al.* 1963: 91-100]。新たな活動拠点となったテナセリム地方のカレンの人口比率は他地域より相対的に高かったため、彼らと宣教師の接触機会も増加し、宣教団のカレンの人々への関心はより深まっていったと推察される。病を患っていたボードマンの病状が悪化したため、メイソンが 1831 年 1 月にタヴォイ地域の活動に新たに加わった。

1830 年代に入るとカレン宣教は急速に発展した。この時期の発展を支えた一つの要因として、聖書翻訳を目的としたカレン文字の考案が挙げられる。これに先鞭をつけたのはウェイドである。スゴー・カレン語を習得する過程でモン文字²⁰⁾を使用することでカレン語の音節を表記できると気づいたウェイドは、既存のビルマ語印刷機を使用可能な体裁にしたいという伝道局の要請にも従うかたちで、ビルマ文字とモン文字に改良を加えてスゴー・カレン文字を考案した。²¹⁾ 1832 年には小冊子とスゴー・カレン語の文法書を完成させ、それぞれ 3,000 部を

18) アマースト (現在のチャイッカミー) とはテナセリム地方にある小さな漁港。

19) 当時ジャドソンは聖書のビルマ語翻訳に専念していたため、担当支部は持たなかった。

20) ビルマ南部からタイにかけて話されているモン語を書き表す文字。モン文字はビルマ文字の母体となったほか、本論にて言及するようにカレン文字の考案にも使用された [藪 2001: 1049-1050]。

21) 彼は 1831 年宣教日誌のなかでカレン語の習得に励んでいる様子を報告している。当初は文字に起こすことは意図していなかったようだが、「言葉を忘れないように書き記す必要があった」とカレン文字考案に至る経緯を説明している [BMBGC 1833: 201]。

発行している [BMBGC 1833: 356]。その後もウェイドの翻訳により、スゴー・カレン語の宣教関連書が次々に出版された。²²⁾ 1838-39 年にかけては、カレン諸語のひとつであるポー・カレン語の文字も初めて考案された。しかし、ポー・カレン語の地域ごとの方言があまりにも多様であったため、一つの表音形態への統一は困難であり、統一された正書法の確立は遅れた。²³⁾

1830 年代のカレン宣教の拡大は、教育活動や施設の整備などの進展にも支えられていた。宣教師らは現地人による自給自立主義に基づく教会運営を目指し、現地人聖職者の育成に力を入れた。当初は宣教師個人によって神学教育が行なわれたが、1830 年にタヴォイ・バプテスト寄宿学校が設立されるなど組織レベルでの教育も開始されていった。神学校で学ぶ学生の多くはカレンが占めたという。このように様々な側面で着実に拡大していたカレン宣教とは対照的に、仏教徒がより多数派であるバマーの人々への宣教は難航した。例えば 1839 年の受浸者数の記録を比較すると、カレン受浸者が 1,190 人であったのに対し、バマー受浸者はわずか 173 人のみであった [BMBGC 1839]。当時のビルマにおける宣教の内実は、急速に拡大していたカレン宣教を中心としたものに変化していたといえる。

バプテスト伝道局のアジア宣教は、1830 年代にはビルマ域外にも拡大していた。1832 年に、当初ビルマ宣教のために派遣されたジョーンズがタイ（シャム）での活動を開始した。タイ宣教はバンコクを拠点としつつも、華人への福音伝道も盛んに行なっていたようで、礼拝や説教はタイ語と中国語の両方で行なわれる場合が多かった。それでも 1837 年にはタイ文字の印刷機が完成し、宣教用小冊子 50 万部が発行された [Peck 1840: 590]。

カレン宣教を中心としたアジアでの宣教が比較的順調であった一方、同時期のアメリカ国内宣教は停滞していた。アメリカ先住民への福音伝道は容易には受け入れられず、1829 年には一部の宣教活動の停止を余儀なくされた。1830 年代に入るとアメリカ政府の政策によってアメリカ先住民の強制移住が開始され、それまでの教会や教育施設を使用した宣教活動の継続は困難となった。比較的順調であったチェロキー宣教を例にとっても、1838-39 年の受浸者数は同年のカレンの受浸者数の 10 分の 1 程度に留まっている [BMBGC 1839: 124-128]。これは一例にすぎないが、宣教活動の柱とされた国内宣教は、1830 年代末には不振に陥っていたといえる。

このように、バプテスト伝道局は 1830 年代末までにアメリカ国内外に宣教フロンティアを拡大させていた。この世界的な広がりのなかで、1820 年代後半から本格化したカレン宣教は教会員数、教会数、師範学校や日曜学校を含む教育施設数、どの側面からみても最大規模であ

22) 1847 年には、カレン語とカレンに関する情報を網羅した『カレン知識の宝典 (*Thesaurus of Karen Knowledge*)』を発表した。正式なスゴー・カレン語—英語辞書は 1849 年に初めて出版された。

23) 統一された正書法が採用されたのは 1852 年のことであった。

り、他地域の宣教活動の追隨を許さぬほど大きな成功を収めるようになった。バプテスト伝道局創設から 1840 年までの宣教の展開をまとめると、ビルマにおける宣教は米国バプテスト派の活動全体を牽引する中心的な活動であったといえる。バプテスト伝道局の設立自体がジャドソンと彼のビルマ宣教を支援することを目的としていたことに加え、ビルマにおける宣教は 1830 年代になっても拡大していた。ただ、現地での宣教の内実は変化しており、1830 年代以降はカレン宣教がビルマでの実質的な成功を担っていた。カレン宣教の発展は、米国バプテスト派にとって大きな意味をもつ主要な活動であったといえよう。

II 『カレンの使徒』における主題と著者メイソンの執筆意図

ビルマにおける宣教は、1830 年代以降カレン宣教を中心としたものに変化しつつあった。当時の活動を支えた人物が、『カレンの使徒』の著者であるメイソンである。本章では、メイソンの経歴を確認しつつ同著における主題と執筆意図について検討する。

II-1 著者フランシス・メイソン ——「カレン像」の発信源たる宣教師

フランシス・メイソンは、1799 年 4 月 2 日にイングランドのヨークに生まれた。1818 年に渡米し、1825 年に浸礼を受けている。²⁴⁾ その後アンドーヴァー・ニュートン神学校に入学し、在学中の 1829 年 12 月に海外宣教師として任命され、ビルマへと向かった [Mason 1870: 212]。

1831 年にビルマに到着すると、メイソンは病に伏したボードマンの代わりとしてタヴォイでの宣教に従事した。彼はカレン信徒と共に村々を訪問し、安息日礼拝や浸礼式を執り行なった。メイソンは 1853 年にタヴォイからタウンゲーへと活動拠点を移したが、体調不良のためその後アメリカに帰国している [ibid.: 305-388]。1857 年に再び来緬すると、1874 年にラングーンで亡くなるまでタウンゲーを拠点として活動を継続した。

カレン宣教史におけるメイソンの最大の功績は、聖書のカレン語翻訳であろう。スゴー・カレン文字の考案に取り組んでいたウェイドと連携を取りながら、来緬後数年のうちにメイソンは聖書のスゴー・カレン語翻訳作業に着手した [ibid.: 296-297; Shwe Wa *et al.* 1963: 313]。1837 年にスゴー・カレン語のマタイ福音書が初めて出版された。1843 年にスゴー・カレン語の新約聖書を完成させると、メイソンは 1847 年から旧約聖書の翻訳に取りかかった。そして

24) 彼の父親と祖父はバプテスト信徒であり、彼も幼い頃から教会に通い安息日礼拝にも参加していたが、当時は熱心なキリスト教徒ではなかったようである [Mason 1870: 37]。アメリカ到着後、アメリカ東海岸各地を訪問中の 1825 年にミズーリ州ランドルフ村でバプテスト派のブットナム牧師の説教を聞き、メイソンは「キリスト教徒になるために何が求められているのか、確固たる信念をつかんだ」という [ibid.: 185]。これが米国バプテスト派を信仰する契機となった。

1853 年に旧約聖書の翻訳を終え、これをもってスゴー・カレン語聖書の全訳が編纂されることとなった [Mason 1870: 297]。メイソンのスゴー・カレン語聖書は教育環境の整備が当時急速に進んだこともあり、教会での礼拝や学校において使用され信徒のあいだに普及していった。

聖書のカレン語翻訳に加えて、メイソンが執筆した数多くの著作も当時のカレンに関する情報として貴重なものであった。池田は、聖書翻訳を含むメイソンの著作活動全般が 19-20 世紀におけるカレンに関する知識の蓄積過程において大きな役割を担っていたと指摘している [池田 2012: 225-230]。来緬まもない 1834 年に、イギリス人行政弁務官メインギーに宛てた書簡の「カレンの伝統」という一編において、メイソンはカレン民族の特徴を記している。そこでは、伝承や慣習を根拠としてカレンがヘブライ起源の旧約の民であるとする独自のカレン民族起源説が提唱された [Mason 1834]。さらに 1852 年にはテナセリム地方での活動を通して得た知見に基づいて『ビルマの自然産物、或いはテナセリム管区の動物相、植生、鉱物、そしてビルマ王朝に関する覚書 (*The Natural Productions of Burmah or Notes on the Fauna, Flora, and Minerals of the Tenasserim Provinces, and the Burman Empire*)』[Mason 1852] を上梓した。しかし出版後まもなく下ビルマ全体が英領化されたため、1860 年に『ビルマ、その民と自然産物 (*Burmah, Its People and Natural Productions*)』²⁵⁾ と改題されて再版された。下ビルマ地域における活動内容や、初版には当初存在しなかった「民族」という項が新たに付け加えられた。しかし、記述の主な対象は依然としてカレンの人々であり、この点は 1852 年の第 1 版と共通している [池田 2012: 228-229]。『ビルマ、その民と自然産物』について、池田は言語学的、宗教学的、民俗学的な知識の枠組み・基準によってカレンに関する情報を統合したものであり、このような試みが企図されたことはメイソンより以前にはなかったとその歴史的重要性を指摘する。他にも、メイソンは 1850 年代後半から 60 年代にかけてカレンの宗教や慣習に関する論文を発表しており、当時のカレンに関する知識人の代表的な存在であった [Mason 1858; 1865a; 1865b; 1868]。

以上からは、メイソンが聖書翻訳やカレン関連書の執筆活動を通してカレン宣教に深く関わった人物であり、19 世紀半ばにおけるカレンに関する情報の主な発信源といえる存在であったことがわかる。つまり、メイソンによる記録は当時のカレンに関する知識の主流を形成したと考えられ、『カレンの使徒』における記述も当時の最も主流なカレン描写の一例として位置づけられる。では次に、同著の内容を確認し、筆者メイソンの主張を明らかにする。

25) 原題は *Burmah, Its People and Natural Productions: Or, Notes on the Nations, Fauna, Flora, and Minerals of Tenasserim, Pegu, and Burmah, with Systematic Catalogues of the Known Mammals, Birds, Fish, Reptiles, Insects, Mollusks, Crustaceans, Annelids, Radiates, Plants, and Minerals, with Vernacular Names* であり、テナセリム以外の地域も含めた博物誌的な性格を持つ書籍として出版された。

II-2 『カレンの使徒』におけるタービュの描写とその主題

『カレンの使徒』の大半がタービュの活動の記録であるため、同著は単にタービュの伝記として認識されてきた。しかし第 6 章の後半から第 7 章にかけては、著者メイソンの主張ともいえる主題が提示されている。よって、以下では後半部分の内容をより仔細にみていく。

(1) 「カレンの使徒」としてのタービュの伝道活動

まず『カレンの使徒』の第 1 章および第 3 章から第 6 章前半にかけて、タービュの経歴と活動の様子がまとめられている。²⁶⁾ ここでの内容は、メイソン自身や他の宣教師、現地人信徒が見聞したタービュに関する記録に依拠している。タービュは 1778 年ごろ、バセイン近郊のウートオという村に生まれた。15 歳まで同村にて両親と暮らしたが、その後は一人で生活するようになった。本人の告白によれば、少年期の彼は荒い気性の持ち主で、窃盗や殺人などを犯していたという [Mason 1843: 10]。自身の犯罪に対する罰金を支払えないということで、タービュはスエベイというバマー・バプテストの下で過ごすことになり、後にジャドソンに身請けされた。²⁷⁾ それ以来タービュは徐々にキリスト教への信仰を深め、1828 年には教会から浸礼を受けることを許された [ibid.: 12]。しかし、ボードマンのタヴォイ行きに同行することを望んだので、タービュの浸礼式は延期となった。その後、タヴォイにおいて 1828 年 5 月 16 日にボードマンによって浸礼式が執り行なわれた [ibid.: 13]。

タービュは、受浸するとただちに遠隔地のカレン集落での伝道活動を熱心に行なった [ibid.: 41-42]。彼の宣教手法は、まず山地の村々を訪問しキリスト教に高い関心を示す者を探し出すというもので、1 カ月ほど山間部に滞在したこともあった。その後、受浸を希望する者を宣教支部の置かれた町へと連れ帰るか、後にアメリカ人宣教師と共にその人々が住む村を再訪する、という手順でカレンの人々をバプテスト派の信仰へと導いたという。タービュはタヴォイ周辺地域での活動に従事した後に、モールメインへ移動した。1837 年頃からはさらに北上しラングーンやマウービンを主な活動拠点としていた。一時的にバセイン地域やモールメイン周辺に派遣されたこともあったが、その後もラングーンを拠点として活動を続けた。タービュは患っていたリウマチが悪化したため、1840 年 9 月 9 日に亡くなった [ibid.: 70]。

26) 『カレンの使徒』第 2 章は、タービュの活動に直接関係するものではなく、米国バプテスト派の到来以前にカレンが置かれていた社会状況について説明している。同章の内容は、ソオ・クアアラ (Saw Quala) というカレン信徒がイギリスのインド総督に対して提出したという請願書の内容に基づいている [Mason 1843: 13]。ここでは、タイ側からもビルマ側からも蔑まれ、奴隷や捕虜にされる哀れな存在としてのカレンの姿が強調される。一方、西洋人のカレンの扱い方は不当なものではなく、タイやバマーのように卑劣ではなかったという [ibid.: 14-19]。この対比を通じて、キリスト教の受容以前と比較してカレンの生活が好転したという文脈が鮮明に提示されている。

27) タービュと初めて接触を持ったジャドソンは、1827 年 4 月 22 日の宣教日誌に「注目に値する未信仰者」と記録している [BMBGC 1827: 370]。

(2) 主題 1: カレン宣教の成功と神の恩寵

第 6 章後半からはメイソンの二つの主張が展開されている。まず一つ目の主題として、タービュという個人の特徴を示すことで、神の恩寵によるカレン宣教の成功が強調された。メイソンは「十字架の教義 [すなわちキリスト教] は非人間的な者を教化するために存在する。悪しき者を『聖なる霊と信仰に満ち溢れた善き人間』へと変容させる。この人物は恩寵を行く先々にもたらし、彼の行く道は神の栄光になぞられている」[*ibid.*] と、神の恩寵と宣教の成功が不可分であると述べる。「非人間的な者」「悪しき者」から「聖なる霊と信仰に満ち溢れた善き人間」への転換といった表現や、福音を各地へ届ける様子など、タービュの受浸や彼の宣教スタイルを想起させる記述となっている。次に、メイソンはタービュの活動の特徴に言及し、彼の伝道活動への熱意について以下のように説明する。

福音を愛する者は、コー・タービュをおいて他にいない。……「誰を派遣しようか、誰が我々のために [宣教地へ] 行ってくれるか」と問いかけるといつでも、「ここにいる私を派遣してください」と答える用意が彼にはできていた。[彼が] 重要と考える活動に対しては、彼は絶えず意欲的で疲れ知らずにみえた。[*ibid.*: 71-72]

上記の内容は、タービュが自ら志願して福音伝道に従事したことを示しており、熱意をもって伝道に取り組んだ姿をよく表している。タービュがこのような熱意を持って活動できた理由について、メイソンは次のように述べる。

[タービュには] 一つのことを遂行するために、持てる全ての力を集中させ発揮する能力があった。しかし、彼の説教の素晴らしい成功 [の理由] を説明するには、別の要因も考慮しなければならない。……コー・タービュは無知で愚かな男であったが、我々の誰よりも良い行ないをした。その理由は神が彼と共にあらせられたからだ。神への奉仕に自らを捧げる者は、神が彼とともにあり、彼を助け、必要な恩寵全てをお恵みくださることに気づくだろう。これがタービュに関する紛れもない真実である: 神は彼とともにあった (イタリック箇所, 原文ママ)。[*ibid.*: 75-76]

ここでの特徴的な点は、伝道師としてタービュが成功した理由を彼個人の素質にのみ求めるのではなく、彼を通じて作用した神の恩寵の力に帰している点である。この論理を裏付けるために、メイソンはタービュの礼拝への姿勢というもう一つの事例を次に紹介している。タービュは聖書を読むか祈りを捧げることに時間を費やし、夜の礼拝後には深夜 10 時や 11 時まで祈り続けることもあった。彼が祈りを 3 度行なわない夜はきわめて稀で、起きているあいだは

頻繁に礼拝していたとメイソンは記している。本人が述べたところによると、一晩中神に祈りを捧げることもあったという [ibid.: 76]。そしてここでも、メイソンはタービュの行動について一貫した見解を示している。

天使のような雄弁さと才能を持つ人間もいるかもしれない。しかし祈りによって浄化されなければ、[そのような者でも] 説教師としての本質的な力が欠けていることになり、主の言葉が炎と槌 [のような脅威的な力]²⁸⁾ を示すことはない。……神の深遠なる仕事に奉仕する者は皆、神に関する考え方の重要な点を示す特別な力が、祈りに宿ることを知る。そして、如何なる真実についても曇りのないはっきりとした考えを持つ者は、正確にそして力強くその真実を示すこともまた知られている。これがコー・タービュの説教者としての成功の秘訣である。[ibid.: 77]

上記では、まず祈りという行為が神から与えられた使命を遂行する力をもたらす崇高なものとして説明されている。そして、タービュが祈りを怠らなかったゆえに神の力が啓示されたという論理が展開される。ここでもタービュの敬虔さと彼の活動を讃えつつも、その背後で作用した神の意志と恩寵の力を示そうという姿勢を見いだせる。タービュが信仰深い勤勉な「良きバプテスト信徒」であったからこそ神の加護を受けたのであり、その結果としてカレン宣教の成功があったという文脈が提示されている。

(3) 主題 2：カレン宣教の財政的利点と将来性の強調

第 7 章ではカレン宣教の存続可能性が強調され、その根拠として財政的な利点が詳述される。まず、メイソンは近年バプテスト伝道局幹部のあいだに海外宣教支部の廃止や国内宣教重視の風潮があることに言及し、資金不足のために「宣教活動を行なう者たちが弱気になり、伝道局の刊行物において [海外] 宣教の廃止が議題とされ国内宣教が叫ばれているこの時に、カレン宣教が全世界におけるアメリカ宣教のなかで最も安価である根拠を示す」ことが大切だと述べる [ibid.: 89-90]。

カレン宣教が最低予算であるとするメイソンの主張には、3 点の根拠がある。第 1 の根拠は、カレンの人々にはキリスト教を受容する素地がある点である。メイソンによれば、神の創世や人間の堕落、そして原罪からの救済などに通ずる伝統的な信仰をカレンの人々は持ち合わせている。そのため、彼らはキリスト教の世界観や教理を自らの伝統的な信仰に照らし合わせ

28) この表現は旧約聖書エレミヤ書 23: 29 などに登場し、神の言葉が圧倒的に強大な力を持っていることを表す。

て理解することができる。他の民族とは対照的に、カレンのあいだで比較的速くかつ大規模にキリスト教受容がすすむのはこのためである。よって、カレン宣教では、キリスト教に関する基本的な事柄を説くために必要な時間と労力を大幅に削減できるというのである [ibid.: 92]。二つ目の根拠は、カレンのあいだでの出版物の普及率の高さである。この点は英国バプテスト派によるインド宣教との対比のなかで説明され、哲学や道徳、宗教関連の翻訳書を即座に理解するインドの現地人は 500 人にも満たなかったという。宗教関連書を配布した場合でも、10 部に対し 1 部、あるいは 1,000 部に対し 1 部読まれる程度であった [ibid.: 92-93]。一方、カレン宣教では学校で読み書きを学んだ者に配布を限定するため、読者数が把握しやすい。よって、出版物や配布物が無駄になることなく効率的に宣教が行なわれると説明される。最後の根拠は、現地での活動の多くがカレン・バプテスト自身によって行なわれているという事実である。ここでメイソンは、現地人信徒の働きぶりに言及し、その具体例としてタービュの名前を再び挙げている。現地人の説教師を支援するために必要な額は、アメリカ人宣教師一人当たりの支援金の 10 分の 1 に相当する 25-50 ドル程度であるという。これは他地域の宣教に係る経費と比較され、カレン宣教の財政的負担の少なさを裏付ける証左として示されている [ibid.: 94-95]。

以上の 3 点を根拠にカレン宣教の存続可能性を示した後、メイソンは現地における海外宣教団の必要性を説明する。メイソンは現地人の説教師は有能でありながらも教育される必要があると指摘し、タービュをその最たる例として再度彼の名前に言及している。メイソンは、「宣教師ほどタービュを重宝する者はいなかった。しかし、その宣教師でさえも彼を思い切って牧師に任命することは決してなかった。それは、質の高い宣学校での十分な教育を通して規律ある精神を獲得することを彼が望んだためであり、これは彼と同じ [民族の] 人々のあいだでよく見受けられる考えである」[ibid.: 94] と説明し、海外宣教師による教育が現地からも必要とされていることを示す。

最後に、カレン宣教の盛況ぶりを客観的に示すため、メイソンは他の宣教師のカレン宣教に関する記録を次々と引用する。名前が挙げられるのは、ボードマン夫妻、カミング夫人、ヴィントン、ウェイド夫妻、1830 年代半ばにビルマに到着しバセインなどで活動していたアボットやキンケイド、マルコムなどで、最後にはビルマにおける宣教の先駆者であるジャドソンの言葉を引用して同著を締めくくっている [ibid.: 96-112]。カレン宣教への肯定的な評価が個人的なものではないことを示そうという意図が読み取れる。

II-3 『カレンの使徒』の主題にみるメイソンの執筆意図

これまで概観した『カレンの使徒』における二つの主題をまとめると以下ようになる。一つ目は、宣教活動の記録としてカレン初の受浸者の生涯を著すことで、神の導きによるカレン

宣教の成功を明示することであった。次に、「最も低予算で活動を継続できる」将来性のある活動としてカレン宣教を強調することが二つ目の主題となった。ここでは、カレン宣教の財政的負担が少ないことを裏づけ、宣教団の必要性を提示することが目的とされた。

最後に、これらの主題を掲げたメイソンの意図を確認しておきたい。まず、一体誰に向けての主張であったのか考える必要がある。想定された読者としては、バプテスト伝道局の定期刊行誌の購読者が挙げられる [BMBGC 1843: 231; 1844: 19]。購読者は実質的にバプテスト派の教会員であった。教会員からの購読料や教会への寄付金がバプテスト伝道局の主だった収入源であったことを踏まえると、²⁹⁾ 彼らは宣教団にとって最大の支援者であったといえる。さらに、メイソンが『カレンの使徒』第 7 章のなかで、バプテスト伝道局が海外宣教に消極的であると述べた後にカレン宣教の財政的優位を説明していることから、この主張はバプテスト伝道局のメンバーにもむけられていたと考えられる。『カレンの使徒』の主題は、海外宣教を支える出資者であった一般信徒と宣教運営を担ったバプテスト伝道局メンバーに対して著されたものであった。

『カレンの使徒』執筆の動機としては、宣教関係者の伝記執筆が宣教事業の一部であったことが挙げられる。初期の海外伝道に携わり多大な貢献をした宣教師の生涯を記すことは宣教の記録としても重要であり、当時の一般的な活動記録の一手法であった。³⁰⁾ よって、カレン初の受浸者であるタービュの生涯を記録すること自体に大きな意味があった。更にメイソンは自伝において、「彼 [タービュ] の死後、私の協力者の一人が彼の人生について伝記を書くべきだと提言した。そして私は、カレン宣教についてより深い興味を抱かせる手段として執筆を行なった」[Mason 1870: 278] と説明している。つまり、初期のカレン宣教の活動記録という役割の他にカレン宣教への関心をより高めることを目的として『カレンの使徒』は執筆された。

以上をまとめると、宣教の支援者であるアメリカのバプテスト信徒に対してカレン宣教の成功と将来性を広く知らしめる必要があると考えたことが、メイソンの抱いた執筆動機であったといえる。では、なぜメイソンはそのような必要があると考えたのだろうか。この疑問を念頭に置きつつ、次章ではバプテスト伝道局と現地宣教との関係に注目し、タービュの描写の背景について考察する。

29) 年度によってばらつきはあるものの、信徒および各個教会からの寄付金は年次歳入の約 5-6 割を占めた。

30) ビルマ宣教の先駆者であるジャドソンに関しては幾つもの伝記が発表されている。カレン宣教に携わった人物で例を挙げるとボードマン、ウェイドのものがある。メイソンは生前に自伝を発表している。

III 『カレンの使徒』の主題の背景 —— 米国バプテスト派の教義と宣教方針

以下では、『カレンの使徒』において展開された二つの主張の背景について、米国バプテスト派の教義や宣教方針の変化の検討を通じて考察する。冒頭において述べたとおり、『カレンの使徒』は宣教関連史料の一つである。それゆえに内容そのものが伝道機関の意向や状況に影響されやすい点と、『カレンの使徒』がアメリカの一般信徒および伝道局メンバーにむけて執筆されたという事実を踏まえ、上記の点に着目してみたい。以下、バプテスト派の基本的な教義理解と財政難による宣教方針の変更についてそれぞれ検討した後に、考察を加える。

III-1 米国バプテスト派教義とタービュの描写

前章において述べたとおり、タービュの描写をもってカレン宣教の成功を示すことは『カレンの使徒』の主題の一つであった。タービュに関する描写がカレン宣教の成功の証とみなされるには、米国バプテスト派の教義やそれに基づく宣教方針に相反する内容であってはならない。そのため、米国バプテスト派の信仰の特徴がどのようなものであったか、以下で確認する。

米国バプテスト派の教義のなかで最も重要とされるのが、聖書の権威と福音伝道である。バプテスト派にとって聖書とは神の言葉を直接啓示するものであり、全ての行動の基準となるものである。そして、福音（すなわち聖書）がもたらされることによって個人が神への忠誠を自覚すると考えるため、個人の信仰告白に基づいた受浸（バプテスマ）が原則とされる。神への忠誠に関しても個々人の奉仕が求められ、なかでも異教徒への福音伝道は重視される。世界宣教を目指す考え方は、英国バプテスト派の宣教師ケアリが掲げた宣教理念に大きく影響されている。ケアリは、未だ福音に導かれていない人々に対して聖書を広め神の御言葉を伝えていくことがキリスト教徒の最大の使命であると考え、海外での活動に力を注いだ人物である。このような基本姿勢がバプテスト連盟設立の際にも宣教方針として採用されたことは、既に確認したとおりである。

米国バプテスト派にとって、信仰とは個人が神に従い仕えることに他ならず、そのために礼拝を行なうことは必要不可欠である。個人による祈りはもちろん、教会で行なう合同礼拝も宣教活動においては重んじられた。1837年の『バプテスト宣教雑誌』に掲載された宣教師の素質に関する記事では、海外宣教師の熱心な祈りによって必ず神からご加護が与えられると説明されている [BMBGC 1837: 74-75]。祈ることで神の恩恵を受け仕えることができるのであり、福音伝道の成功は祈りなくしてあり得ないという礼拝の重要性を示す内容となっている。

こうしたバプテスト派の信仰の特徴は「熱心に礼拝を捧げ、積極的に伝道活動に従事したタービュ」という描写にも見受けられるモチーフである。『カレンの使徒』において、ター

ビュは常に人々のあいだでの伝道に専念し、礼拝を欠かすことのなかった良きバプテストとして描かれていた。タービュの描写の特徴とバプテスト派の信仰が類似している事実は、米国バプテスト派が信じる教義を体現した模範的なバプテスト信徒の姿としてタービュが描写されたことを示している。すなわち、同著におけるタービュの描写は「理想のバプテスト派信徒」を輩出するカレン宣教の成功を裏づけようとした試みであったといえる。

III-2 アメリカ経済不況と宣教運営の方針の変化

つづいて、『カレンの使徒』の二つ目の主題であるカレン宣教の財政的利点と将来性が強調された背景について検討したい。この主張が宣教経費に関するものである以上、当時のバプテスト伝道局の財政状況とその影響を明らかにする必要がある。

結論からいうと、1830 年代後半から 40 年代にかけてバプテスト伝道局は財政難に直面していた。その原因は 1837 年に起こったアメリカの経済不況である。それまで大量に流通していた銀行券³¹⁾の過剰供給を抑制するため、ジャクソン連邦政府は 1836 年末に正貨回状を通告し、公有地購入の際の支払いを金貨又は銀貨の本位貨幣のみに制限した。これをうけ銀行券の価値の暴落を恐れた人々が換金を求めて銀行へ殺到し、正貨の需要と供給の均衡が大きく崩れた。1837 年には州法銀行の多くが支払い停止に追い込まれ次々に破産する事態となり、アメリカ経済は本格的な不況に陥っていた。³²⁾

この 1837 年不況のバプテスト伝道局の財政に対する影響は、不況そのものの同様、深刻なものであった。表 1 は、1830 年代から 40 年代にかけてのバプテスト伝道局の資金総額、他団体からの支援金額および余剰・負債総額の変遷を示したものである。資金総額をみると、不況が本格化した 1837 年直後の数年間は依然として増加しており、1839-40 年度になって初めて大幅な資金の減少がみられる。一見すると、不況の直接的な影響はなかったかのようである。しかし表 1 の余剰・負債総額に注目すると、1837 年までは余剰金が創出されていたのに対し、同年を境に減少し始め 1840-41 年度には負債を抱え込むまでに至っている。この数年のあいだは、ローンの利子回収の前倒しや、他の協力団体からの基金を得るなどの対応を講じていたことが、他団体からの基金額の推移から窺える。³³⁾しかし、次第に資金総額・余剰額はともに減

31) 1830 年代当時のアメリカ経済は土地投機ブームに沸いており、公有地買収の元手として銀行券が使用されていた。1836 年における連邦政府の公有地売却代金の多くは、この銀行券で支払われたという [宮田 1989: 17-18]。

32) 正貨通告は 1838 年 5 月に廃止されたが、その影響は 1842 年まで継続した [宮田 1989: 44-47; 中村 2011: 311]。

33) 財政悪化に伴い、バプテスト伝道局は 1838 年と 1839 年ではそれ以前の約 3 倍の額である 20,824.23 ドル、20,894.48 ドルを株式配当や利子の回収額として計上している [BMBGC 1836: 263; 1837: 150; 1838: 167; 1839: 154]。しかし、1840 年の回収額は 4,937.86 ドルに留まっており、財政悪化を食い止める有効な手段とはならなかった。

表 1 バプテスト伝道局の資金総額・基金総額・余剰負債額の変動 (単位:ドル)

年度	資金総額	他団体基金	余剰・負債
1833-34	63,551.01	不明*	462.43
1834-35	58,520.28	11,500	3,602.82
1835-36	59,770.15	不明*	162.1
1836-37	72,172.07	10,000	3,120.61
1837-38	83,540.80	20,775	1,629.90
1838-39	110,765.11	88,241	574.37
1839-40	66,335.92	18,400	903
1840-41	83,841.62	24,100	-1,214.92
1841-42	52,137.10	19,054	-6,871.76
1842-43	59,751.06	不明*	-14,859.16
1843-44	76,948.00	14,022	-27,706.16
1844-45	82,302.95	14,400	-40,188.49
1845-46	100,219.94	20,000	-34,835.09
1846-47	85,487.24	20,000	-33,687.56
1847-48	86,226.73	20,000	-29,295.36

出所: *American Baptist Magazine* および *Baptist Missionary Magazine* の各年の年次報告書を基に、執筆者作成 [BMBGC 1835-45; ECABM 1846-48]。

注: *1833-34 年度, 1835-36 年度, 1842-43 年度に関しては、寄付金と混同されるなど出処を明らかにできない基金が多く具体的な数値を算出することが困難であるため、ここでは不明とする。

少していき、1840 年代には莫大な負債を抱え込むようになった。

この財政悪化のため、バプテスト伝道局は海外宣教の支援体制の見直しを余儀なくされた。宣教運営方針の変更は 1841 年の第 10 回年次総会において正式に通知され、まずバプテスト伝道局から伝道連盟の会長への年次報告というかたちで報告された。この報告の冒頭では「特に現地人助手の任命と出版運営に関して、より具体的な方針を示すこととする」と明言されており、現地人信徒の活用と出版活動の 2 点に関して修正が加えられたことがわかる。具体的な内容とその理由は以下のとおりである。

現地人の助手について: 現地人の尽力は、宣教活動を遂行するうえできわめて重要である。最初期から今日までの教会の歴史は…… [キリスト教世界の] 拡大の永続化のための力が土着の人々の聖なる才能のうちに宿ってきたことを十分に裏付けている。

出版について: 福音を伝える次、あるいは同じくらい [に重要なこと] は、聖書と小冊子の準備および出版である。……基本的な決定条件として、聖書と小冊子全ての部数は各人の意見によって定められるべきである。そして、これら [の刊行物の配布] が効果的であると確信できない地域では、[出版活動を] 停止すべきである。流通方法および範囲は、各宣教師が暮らす地域の人口、人々の識字率と一般知性の度合い、そして刊行物の内容に対する関心の高さによって決定されなければならない。

現地人助手の採用や学校の建設、その他適当な宣教活動のための支出に関する制約は、宣教資金の状態に問題がなかったことから、[これまで] 設けていなかった。この運営システムを廃し、現地にて苦勞する宣教団が資金の余分を貯蓄することを禁ずるのはきわめて苦痛である。しかし、必要の時が来た。連盟の資金は負債に達している。連盟総会において承認され定められた方針を遂行するために、何としても借金を回避し負債を負わないために必要な制約が設けられた。[BMBGC 1841: 168-170]

こうした現地宣教団の資金運用の制限と管理強化の背景に、長期化する財政難への危惧があったことは明らかである。その後続けて開催された連盟総会において、会長自らが方針の修正を各地方連合代表者の前で説明した。そこでは、上記の内容と併せて諸経費に関する詳細な報告の義務づけ、緊急に資金が必要な際の支給額に関する諮問の実施、宣教成果があがらない活動の継続の検討など、宣教資金の運用に関してより厳しい態度が表明された [ibid.: 205.]。次節では、これらの一連の措置に対する現地での対応について検討する。

III-3 宣教運営の方針変化の現地への影響

バプテスト伝道局の財政難に伴う宣教運営の方針転換は、人員不足と活動規模の縮小というかたちで現地宣教に影響を与えた。例えば、1838 年 11 月にバプテスト伝道局宛ての書簡のなかで、ウェイド夫人はカレン宣教の苦境を訴えている。新たな宣教師の派遣を懇請し、その理由として「多くのビルマの人々が望むにもかかわらず、師範学校を 1 回も開くことができません。そして状況の好転が望めないなか、同等の者 [宣教師] が人々のあいだで奉仕するために派遣されるまで教会は停滞するのです」と現地の困難な状況を説明している [BMBGC 1840: 219]。この手記からは、人員不足が深刻になるなか、教育活動を制限せざるを得なかった状況であったことが見て取れる。³⁴⁾

メイソンも同様に、人員不足によって現地の活動が制限されることを憂慮していた。1841 年の宣教日誌では、宣教師不足による影響について以下のように記している。

不信心な親の子供はほとんど我々の学校には来ない。そして、教育の強みを彼らに理解させることは非常に困難であり、そのためキリスト教教義の実践を多く必要とする。……

34) タヴォイ以外の各宣教支部も新たな宣教師派遣の要請を幾度となく行なっていた。1841 年にはモールメイン支部やアラカン支部担当の宣教師らが、送金の滞りによる宣教支部運営の困難さを訴えている。さらに、ビルマ地域以外における海外宣教の状況も同様であり、例えばタイ宣教や西アフリカにおいて活動した宣教師らそれぞれが追加資金や新たな宣教師の派遣を要請している [BMBGC 1842: 97, 169, 194-195]。

人々のなかでの直接的な奉仕が必要である。さもなくば、全てのことが後退してしまうだろう。より多くの説教、教育、礼拝、そしてより永続的な奉仕が求められている。キリスト教徒は教えも受けずに四散している。子供たちは教師「および教育」を求めることさえ知らずに成長する。そして多くの非キリスト教徒が毎年毎年、1月から12月まで福音を聴くこともなく過ごしている。[BMBGC 1842: 86]

この内容は、非キリスト教徒のカレンはこれまで独自の文字を持たなかったために、読み書きを教えるバプテストの教育活動に関心を示さないという認識を前提とした上で、彼らの関心を高めるために伝道活動が必要であると主張するものである。しかし、実際は遠隔地での活動を断念せねばならなかった。宣教師たちは集会や礼拝を開くこともできず、教育活動も十分に行なえない状況に置かれていた。満足に説教すら行なえない現況のままでは、現在の信徒の信仰も薄れてしまい、福音伝道も後退してしまうと焦燥感を募らせるメイソンの心情が窺える。

上記を一例とした宣教師の報告は、資金と人材不足に対応するために宣教の現場では活動規模や形態を縮小せざるを得なかった状況を示している。活動規模を縮小し資金捻出に専念することで、宣教団という組織自体の存続は維持できたはずであり問題はなかったとも考えられるが、現地における不安や焦り、そして宣教師たちが現状に満足していなかった事実注目する必要がある。実際にこの時期に閉鎖されたビルマ地域の宣教支部はなく、全ての地域で活動は継続していた。しかし、より重要な点は、伝道活動を最大の使命とする宣教師達にとって、活動を縮小し現状を維持するだけでは神への奉仕として十分とはい切れず、決して良しとされるものではなかったという点である。

これら一連の状況を踏まえると、カレン宣教の財政的利点の強調は、1841年に変更された宣教の運営方針に対応した結果であり、更なる支援を要請する手段であったと考えられる。宣教の運営方針が変更された結果、現地人信徒の積極的な活用と出版活動に対する規制、さらに宣教資金の管理強化が目指されることとなった。『カレンの使徒』における現地人伝道師を採用することの経済的利点やタービュを例とした現地人信徒の活躍に関する説明は、上述の変更された方針内容と一致する。さらに、出版物配布の効率性に言及している点も、宣教方針の変化に対応したものとみなせる。メイソンの主張するほどの効率性をもって出版物が人々のあいだで果たして読み親しまれたのか、その真偽は定かではないにせよ、宣教方針にそった内容を著すことによって、カレン宣教存続と発展のために支援を引き出そうとしたと考えられる。

加えて、バプテスト伝道局の活動のなかで最大の成功を収めていたカレン宣教こそが最も低予算であるという説明は、その経済的優位性をさらに際立たせることになっただろう。米国バプテスト派にとって海外宣教の代名詞であったカレン宣教が伝道局の運営指針にそった成功を収めていると位置づけたことも、教義や信仰の面でも最も望ましい活動として訴えかけること

を可能にしたと考えられる。カレン初の受浸者であり献身的に働いたタービュは、上記のようなメイソンの主張に見事にあてはまる存在であったのである。

IV バプテスト宣教の枠組みのなかで形成される「良きバプテスト」カレン像

これまでの議論を簡潔に整理してみよう。『カレンの使徒』の一つ目の主題であったタービュの描写には、米国バプテスト派の教義理解に基づいた「理想のバプテスト信徒」像が存分に反映されていた。二つ目の主題であるカレン宣教の財政的な優位性の強調は、バプテスト伝道局の財政難に伴う宣教方針の変化への対応の結果であった。宣教資金の管理が厳しくなるなか、支援獲得の必要性を強く感じていた宣教師がタービュの存在を福音伝道の成功の証しとして捉え、カレン宣教の将来性を訴えようとしたことはごく自然な思考論理といえる。とはいえ、ここでの議論はタービュを例にしたカレン像が恣意的に創出されたと過度に主張するものではない。宣教支援獲得のためという経済的な動機は、確かに宣教団にとって都合の良いタービュ像を意図的に創出したともみなせる。その恣意性について直接的に言及する記述はないため、史料からの実証は難しい。しかし、福音伝道を生涯における最大の使命と考える海外宣教師にとって、宣教活動維持のために安定した支援を得ることは必須であり、資金獲得に奔走することもまた神への奉仕の一形態であったと捉えられる。³⁵⁾ このように考えれば、敬虔で献身的なタービュというイメージは、米国バプテスト派の教義や宣教運営の方針の枠組みのなかで創出されたものであったといえる。

これまで論じてきたタービュの描写は、メイソンの「カレン民族」観の枠組みを脱するものではない。先述したとおり、メイソンは 1834 年には既に独自のカレン民族観を提示しており、飲酒や精霊信仰などの慣習を捨て熱心に礼拝を行なう良きバプテストとしてのカレンのイメージを確立していた [Mason 1834: 384-391]。³⁶⁾ 『カレンの使徒』における敬虔なキリスト教徒としてのタービュの描写は、メイソンのカレン民族像をさらに強固にしたと推察される。メイソンの発信した知識や記録が当時のカレンに対する主流な観方を形成した点を踏まえると、本稿は『カレンの使徒』を事例として、19 世紀半ばのカレン像形成の背景を再考したものであるといえる。

米国バプテスト派宣教史料はカレンに関する知識形成の歴史において重要な位置を占めてお

35) 前章末尾で述べたとおり、たとえ奉仕の一形態であったとしても、資金捻出のみに専念しなければいけない状況はよしとされなかった。資金調達は、人々への福音伝道の実践というより大きな目的のための活動として重要であったと考えるべきである。

36) 一方、1 度浸礼を授かっても飲酒を続け精霊の供養を依然として行なっているカレンについては、きわめて不信心であり福音に適さない人々だと述べている [BMBGC 1833: 316; 1834: 78]。

り、今日でも主要な史料の一つであることは疑いようがない。しかしこれらの史料に依拠する場合、本国の伝道機関と現地宣教のつながりを注視していく必要があるだろう。伝道機関や宣教団の文脈を等閑視することは、「キリスト教徒であるカレン」として描かれた彼らの姿を見過し、民族という参照枠組みのみで彼らを捉えることになる。当時の宣教師たちは人種主義的観点を確かに持ち合わせており、彼らにとってカレンは間違いなく未開の教化されるべき一族であった。しかし、宣教という文脈に従ってみると、カレンがどのような民族であるかという点に加えて、キリスト教を真に受容した人々であるかどうか、あるいは敬虔な信徒であるかといった点が土着の人々を語るうえでより重要となる。本稿はこの点の論証を試みたものであり、民族としてだけでなく、「良きバプテスト信徒」としてのカレンという描写の在り方を示そうとした。

この観点に立てば、カレン史理解に関する問題を異なる角度から捉えることもできる。多数派である仏教徒の存在が看過されてきたことから、バプテスト・カレン中心的な歴史理解が批判的に検証されていると冒頭にて述べた。だが、そもそもこの問題は、キリスト教徒の姿を中心に記録した宣教関連史料を用いながら、カレン「民族」を捉えようとしてきたことで生じた問題とも考えられる。通説に対するこの批判がきわめて重要であることは論をまたない。だが、その議論のなかでは、カレン・バプテストという存在に対する視角そのものは再考されないままであり、むしろ民族という概念から自由になりきれない場合もある。一方、バプテスト宣教史の文脈から捉え直してみれば、異なる理解の可能性がみえてくる。³⁷⁾ 米国バプテスト派宣教の歴史的展開やアメリカの社会状況との連関のなかで浮かび上がってくるのは、「理想のバプテスト信徒」としてのカレンの姿であった。カレンと呼ばれた人々のなかでバプテスト派コミュニティが限定的な広がりしか持たないことは事実であるが、宣教をあえて中心軸に据えてみることで、民族的な観点から捉えられてきたカレン・バプテストの存在を異なる視点で素描できると考えられる。

お わ り に

本稿は、『カレンの使徒』におけるタービュの描写を通じた著者メイソンの主張の背景について、バプテスト伝道局と現地宣教との関係に着目して分析した。その結果、1830 年代後半

37) Womack [2005] は、19 世紀中葉から 20 世紀中葉にかけてのカレン関連書籍の出版状況と流通ネットワークの形成史について、異なるカレン系言語での出版物の拡がりから捉えるという視点をを用いている。この観点は、「民族」史でないカレン史の描き方の一つとして参考になる議論である。ただ、Womack の関心がカレン知識、情報の空間的広がり位相を捉えることにあったのに対し、本稿および言及した先行研究は出版物や記述そのものにおけるカレンの描かれ方を扱っており、分析対象が若干異なる。

からのバプテスト伝道局の財政悪化に伴った宣教運営の方針の変化とバプテスト派の教義にそったかたちでカレン・バプテストの姿が描き出されたことを提示した。「福音伝道に積極的に従事し、神のご加護を受けた敬虔なバプテスト信徒」としてのタービュの描写は、1840 年代前半の宣教運営をめぐる本国伝道機関と現地宣教間でのやり取りのなかで生じた、きわめて歴史的な現象であった。特に両者のあいだでの問題が宣教資金や支援に関するものであったため、本稿において考察した内容が主題とされた。つまり、当時のカレンを語る手法は本国伝道機関を取り巻く状況や宣教理念の文脈によって規定されていた面があった。以上の点は、『カレンの使徒』におけるタービュに関する描写やカレン宣教継続のための支援獲得という論点が、1840 年代当時の文脈のなかでこそ意味を持ちえたことを意味する。ただ、メイソンの主張が展開された固有の文脈は時代の変遷とともに薄れていった一方で、バプテスト派の「理想の信徒」像にそったタービュについての記述は後世においても注目され続け、カレン・バプテストによっても頻繁に言及されていった。その結果、その主題自体は後景に退き、「理想の信徒」であるタービュの伝記として『カレンの使徒』は知られるようになったと考えられる。

本稿における分析視角は、19 世紀を通じたカレンをめぐる歴史を再考するためにも有効であると考えられる。1840 年代以降、カレンとバプテスト宣教を取り巻く状況は著しく変化していく。まず第 2 次英緬戦争（1852 年）終結後にヤンゴンを含む下ビルマ全体がイギリスへ割譲され、英領下のカレン宣教地域が拡大した。さらに 1854 年にはカレン国内宣教協会（Karen Home Mission Society）の設立というカレン宣教の現地化も起こった。そして 1881 年には、ビルマにおいて初の民族的組織と称される「カレン民族協会」がバプテスト信徒を中心に組織された。この諸変化はこれまで一様に「カレン民族」の活動の歴史として捉えられてきた。しかしながら、宣教とのつながりをより意識してみると、カレンの人々の周辺で生じたこれらの諸変化は果たして民族的なものであったのか、バプテスト派を中心とした宗教性の強い事象なのか、あるいは双方の相互作用はどの程度であったのかといった点を考えていく必要があるといえる。具体的な変化の諸相についてはより緻密な分析を要するが、上記に挙げた点に関しても現地宣教と本国伝道機関の関係性を無視して説明することはできないであろう。

今後は、1840 年代以降の米国バプテスト派側の状況の変化とカレン宣教の展開の諸相を明らかにしていくだけでなく、カレン史研究の多角化を目指すためのより大きな課題としてスゴー・カレン語史料からの検討も必須となる。現存するスゴー・カレン語史料としては、主に 19 世紀半ばから発行されたバプテスト派月刊紙や 20 世紀初頭にカレン・バプテストの歴史をまとめた書籍などがある。これらの史料はカレン・バプテスト自身による記録を含むため、民族意識形成過程の諸相をも再検討する可能性を持つ。以上のような課題を検討していくうえでも、宣教の文脈から時々のカレン描写の手法を考察していく視点は有効であろう。この視点に基づいた検討を積み重ねていった先には、民族的観点から捉えられがちであったカレン・バプ

テストに関して、これまでとは異なる歴史的眺望が広がっているのではないだろうか。

謝 辞

本稿における議論は、ヤンゴンのカレン・バプテスト神学校関係者をはじめとするカレン・バプテストの方々との交流から着想を得ており、彼らの多大な協力なしには成立しなかった。また、本稿執筆にあたり 2 名の査読者の先生方からはたいへん有益なコメントを多く頂戴した。ここに記して感謝申し上げる。

参 考 文 献

日本語文献

- 速水洋子. 2002. 「黄金の本とカレンの文字 —— ビルマにおけるキリスト教宣教」『宗教と文明化 —— 20 世紀における諸民族文化の伝統と変容』杉本良男（編），260-277 ページ所収。東京：ドメス出版。
- . 2004. 「タイ・ビルマ国境域の〈カレン〉から見る民族と宗教の動態」『変容する東南アジア社会 —— 民族・宗教・文化の動態』加藤剛（編），201-243 ページ所収。東京：めこん。
- 飯島 茂. 1974. 「国民形成と少数民族問題 —— ビルマにおけるカレン族の悲劇」『アジア・アフリカ言語文化研究』8: 117-135.
- 池田一人. 2000. 「ビルマ独立期におけるカレン民族運動 —— “a separate state” をめぐる政治」『アジア・アフリカ言語文化研究』60: 37-111.
- . 2009. 「ビルマ植民地期末期における仏教徒カレンの歴史叙述 —— 『カイン王統史』と『クウイン御年代記』の主張と論理」『東洋文化研究所紀要』156: 430-359.
- . 2012. 「ビルマのキリスト教徒カレンをめぐる民族知識の形成史 —— カレン知の生成と『ブアカニョウの歴史』の位置づけについて」『東洋文化研究所紀要』162: 154-266.
- 伊藤高章. 1990. 「十九世紀初期英国教会福音主義の『東インド宣教論』」『キリスト教史学』44: 19-35.
- 伊東利勝. 2006a. 「『カレン』の発見 —— 西洋人によるコンバウン朝ミャンマーのカレン像（一）」『文學論叢』133: 17-37.
- . 2006b. 「『カレン』の発見 —— 西洋人によるコンバウン朝ミャンマーのカレン像（二）」『文學論叢』134: 23-48.
- . 2011. 「ビルマ古典歌謡カレン・オーダンの眼差し」『愛大史学 —— 日本史・アジア史・地理学』20: 43-78.
- . 2012. 「一八五六～五八年『カレンの反乱』のカレンについて」『愛大史学 —— 日本史・アジア史・地理学』21: 45-92.
- 金丸英子. 2011. 「アメリカのバプテスト教会」『見えてくるバプテストの歴史』バプテスト史教科書編纂委員会（編），113-173 ページ所収。横浜：関東学院大学出版会。
- 加藤昌彦. 2011. 「言語・文化・歌謡」『ミャンマー概説』伊東利勝（編），269-287 ページ所収。東京：めこん。
- 宮田美智也. 1989. 「アメリカにおける 1837 年恐慌と信用制度」『金沢大学経済学部論集』9(3): 14-52.
- 溝口靖夫. 1964. 「アメリカン・ボードの初期の教派関係」『論集』11: 1-19.
- 村椿真理. 2011. 「近世イングランドのバプテスト教会」『見えてくるバプテストの歴史』バプテスト史教科書編纂委員会（編），65-112 ページ所収。横浜：関東学院大学出版会。
- 中村甚五郎. 2011. 『アメリカ史「読む」年表事典 2 —— 19 世紀』東京：原書房。
- 大江 満. 2003. 「近代キリスト教海外伝道方針の確執」『宗教と社会』9: 113-132.
- 藪 司郎. 2001. 「モン文字」2001. 『世界文字事典』（言語学大事典 別巻）河野六朗；千野栄一；西田龍雄（編著），1049-1057 ページ所収。東京：三省堂。

外国語文献

- Aung Chain, Saw. 2003. *Tàinyíndhâ kayin í thamâin cāun yincēmu hn̄in kayin pyine thamāinhpyi'zinaciin* [原住民族カインの歴史文化とカイン州小史]. Yangon: Sēinyanshein sapeitaī.
- Board of Managers of Baptist General Convention. 1814. *Proceedings of the Baptist Convention for Missionary Purposes*. Philadelphia.
- . 1827-35. *The American Baptist Magazine*. Vols. 8-15. Boston.
- . 1836-45. *Baptist Missionary Magazine*. Vols. 16-25. Boston.
- Doh Say, Saw 1993. Toward a New Missionary Impulse of the Karen Baptist Church of Myanmar. Dissertation submitted to the Fuller Theological Seminary.
- Executive Committee of the American Baptist Missionary Union. 1846-48. *Baptist Missionary Magazine*. Vols. 26-28. Boston.
- Go Lām Pau. 2012. Ahceipya myanma hkari'yan thamāin 16 yazūale hma 21 yazū pahtama sezūhni' ahti [ミャンマー・キリスト教史概要 — 16 世紀半ばから 21 世紀の 2010 年代まで]. Aloun, Yangon: Phileo Mission.
- Grammell, William. 1854. *A History of American Baptist Missions in Asia, Africa, and Europe and North America*. Boston: Gould and Lincoln.
- Gravers, Mikael. 2007. Conversion and Identity: Religion and the Formation of Karen Ethnic Identity in Burma. In *Exploring Ethnic Diversity in Burma*, edited by Mikael Graevrs, pp. 227-258. Copenhagen: NIAS Press.
- Harriiden, Jessica. 2002. Making a Name for Themselves: Karen Identity and the Politicization of Ethnicity in Burma. *The Journal of Burma Studies* 17: 84-114.
- Hayami, Yoko 2004. *Between Hills and Plains: Power and Practice in Socio-Religious Dynamics among Karen*. Kyoto: Kyoto University Press; Melbourne: Trans Pacific Press.
- Ikeda, Kazuto. 2012. Two Versions of Buddhist Karen History of the Late British Colonial Period in Burma: *Kayin Chronicle* (1929) and *Kuyin Great Chronicle* (1931). *Southeast Asian Studies* 1 (3): 431-460.
- Ito, Toshikatu. 2007. Karen and Konbaung Polity in Myanmar. *ACTA ASIATICA* 92: 89-108.
- James, Helen. 2002. Adoniram Judson and the Creation of a Missionary Discourse in Pre-colonial Burma. *The Journal of Burma Studies* 7: 1-28.
- Keyes, Charles F. 1996. Being Protestant Christians in Southeast Asian Worlds. *Journal of Southeast Asian Studies* 27 (2): 280-292.
- Kuroiwa, Yoko; and Verkuyten, Maykel. 2008. Narratives and the Constitution of a Common Identity: The Karen in Burma. *Identities: Global Studies in Culture and Power* 15 (4): 391-412.
- Mason, Francis. 1834. Tradition of Karen. *The Baptist Missionary Magazine* 14: 328-393.
- . 1843. *The Karen Apostle: Or, Memoir of Ko Thah-Byu, the First Karen Convert, with Notices concerning His Nation*. Boston : Gould, Kendall and Lincoln.
- . 1852. *The Natural Productions of Burmah or Notes on the Fauna, Flora, and Minerals of the Tenasserim Provinces, and the Burman Empire*. Maulmein: American Mission Press.
- . 1858. Notes of the Karen Language. *Journal of the Asiatic Society* 27 (2): 129-168.
- . 1860. *Burmah, Its People and Natural Productions: Or, Notes on the Nations, Fauna, Flora, and Minerals of Tenasserim, Pegu, and Burmah, with Systematic Catalogues of the Known Mammals, Birds, Fish, Reptiles, Insects, Mollusks, Crustaceans, Annelids, Radiates, Plants, and Minerals, with Vernacular Names*. Rangoon: Thos. Stowe Ranny.
- . 1865a. Religion, Mythology, and Astronomy among the Karens. *Journal of the Asiatic Society* 34 (3): 173-188.
- . 1865b. Religion, Mythology, and Astronomy among the Karens. *Journal of the Asiatic Society* 34 (4): 195-250.
- . 1868. On Dwelling, Works of Art, Laws, etc of the Karens: Embracing Query 50 to Query 76. *Journal of the Asiatic Society* 38 (3): 125-169.
- . 1870. *The Story of a Working Man's Life*. Oakley: Maison & co.
- Peck, Solomon. 1840. History of the Missions of the Baptist General Convention. In *History of American*

- Missions to the Heathen, from Their Commitment to the Present Times*, edited by Joseph Tracy, Solomon Peck *et al*, pp. 353–620. Spooner & Howland.
- Po, San C. 1928. *Burma and the Karens*. London: Elliot Stock.
- Purser, W. C. R. 1911. *Christian Missions in Burma*. Westminster: Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts.
- Rajah, Ananda. 2002. A 'Nation of Intent' in Burma: Karen Ethno-Nationalism, Nationalism and Narrations of Nation. *The Pacific Review* 15(4): 517–537.
- Shwe Wa, Maung; Sowards, Genevieve; and Sowards, Erville. 1963. *Burma Baptist Chronicle*. Yangon: Burma Baptist Convention.
- Smeaton, Donald M. 1887. *The Loyal Karen of Burma*. London: K Paul, Trench & co.
- Smith, Martin 1991. *Burma: Insurgency and the Politics of Ethnicity*. London: Zed Books Ltd.
- Thawngmung, Maung Ardeth. 2011. *The Other Karen in Myanmar: Ethnic Minorities and the Struggle without Arms*. New York: Lexington Books.
- Trager, Helen G. 1966. *Burma through Alien Eyes: Missionary Views of the Burmese in the Nineteenth Century*. New York: Asia Publishing House.
- Womack, William. 2005. Literate Networks and the Production of Sgaw and Pwo Karen Writing in Burma, c. 1830–1930. Doctoral Dissertation at School of Oriental and African Studies, University of London.

(2014 年 10 月 2 日 掲載決定)